



この本をお読みになった方へお願い

あなたはこの本を読まれて、どんな感銘を受けられたでしょうか。「読後の感想」を左記あてにお送りいただけましたら、ありがたく存じます。なお、このつぎには、どんな本を読みたいとお考えですか。この本には、一字でも誤植がないようにと願っておりますので、もしも、お気づきの点がありましたら、あわせてお教えてください。お手紙にはご職業や年齢なども書きそえてくださいませんか。

東京都文京区音羽町三ノ一九

光文社

神吉晴夫

長編推理小説 ^{しせい} 刺青殺人事件

昭和38年5月15日 初版発行

昭和38年5月20日 10版発行

¥ 260

著者 ^{たか}高 ^ぎ木 ^{あき}彬 ^{みつ}光

東京都渋谷区本町1-8

発行者 神吉晴夫

印刷者 盛英信

東京都文京区関口町140・慶昌堂

発行所 東京都文京区音羽町3 株式会社 光文社
振替東京115347

落丁本・乱丁本は本社でお取り替えいたします。

(明泉堂製本)

表紙の模様・意匠登録 116613

© Akimizu Takagi 1963

長編推理小説

し せい
刺青殺人事件

たか ぎ あき みつ
高木 彬 光



カッパ・ノベルス

目次

第一章	恐ろしきトルソ……………	五
第二章	マダム・セルパン……………	七
第三章	刺青競艶会 いれずみ の女王……………	元
第四章	三すくみの呪い……………	三
第五章	憑 つ かれた人々……………	五
第六章	胴体のない死体……………	六
第七章	完全犯罪……………	七
第八章	刺青の女をめぐる男たち……………	八
第九章	詰むや詰まざるや……………	一〇
第十章	大蛇丸 おろちまる と綱手姫 つなでひめ ……………	二二

第十一章	土蔵の中の死体……………	一三四
第十二章	自雷也還る……………	一三六
第十三章	皮を剥がれた死体……………	一五〇
第十四章	殺人事件覚書……………	一五三
第十五章	神津恭介登場……………	一五九
第十六章	蛞蝓の足跡……………	一八一
第十七章	非ユークリッド幾何学……………	一九〇
第十八章	華麗なる寄せ……………	二〇七
第十九章	地獄の前のラブシーン……………	二三三
第二十章	心理の密室……………	二三三
あとがき……………		二五二

第一章 恐ろしきトルソ

世に刺青の美を知る人は少ない。ひそかに肌に秘められた命を刻む芸術の真価に心をうたれる人の数はけっして多くはない。

だが、それはおそらく、かたくなな先入観の所産であらう。たとえば街の土方や与太者などの、日にやけた赤銅色の地肌の上に、青黒いみみずばれのようにのたくっている粗雑な素人彫りだけを見て、刺青というものは、すべてこんなものだと思ひこんだのか、それとも、刺青をするような人々は、男も女も、やくざか凶悪な犯罪者か、社会のどん底に沈潜している人間の屑のような存在、人生という戦場の敗残者ばかりだときめこんで、敵然たる歴史的眞実にさえ、強いて眼を蔽おうとしたものか、そのどちらかに相違ない。

しかし、延々数千年の人類史の中に、その起源を見いだすこともむずかしいほど古く伝わる風俗には、やはりそのよつて来る所以があると考えるのが至当であらう。

たとえば、ある米国の心理学者は、

「刺青は性欲の具現である」

と断定している。一方には、長い鋭い針があり、一方には皮膚を破つて、注ぎこまれる液体がある。与えるものと受けるもの——あきらかに、性行為の楯の両面が、この一つの風俗に見てとられる。

このように、人間のもつとも原始的な本能に根ざす行為であるために、刺青という風俗は、たとえ一時は禁圧され、絶滅したように思われても、不死鳥のようにいつかはかならずよみがえつて来る不滅の命を持っているともいえるのだらう。

身体髪膚コレヲ父母ニウク——というような、儒教の思想に培われた日本人には理解もむずかしいことなのだが、近代の欧米諸国においては、刺青はけつして下層階級だけの独占物ではなかった。ほんの一時代前まで、ヨーロッパの各王室で、刺青は王侯貴顕の間に愛され、ひろく流行していた。

いわゆる玉体を針で刻み、不滅の絵模様を肌にとどめた王者の名を歴史の中にたどつてみると、英国のエドワード、ジョージ両皇帝、ロシア最後のロマノフ皇帝、ギ

リシャのオルガ皇后など、その数は枚挙にいとまもない。

そして、そのような流行をまき起こす動機を作ったのも、日本の刺青の技術が、世界に広く認められていたためともいえないこともなかった。

明治初年、故ジョージ五世がまだ皇太子の当時、東洋旅行中に日本へ立ちよって、刺青を施したということがわかったとき、ロンドン・ワールド紙をはじめ、英国の各新聞は、詳細にこのことを報道した。しかし、通信連絡の不便な時代であったから、この皇太子の刺青が、当時の下層船員に流行したような、鼻を両側に貫く矢の模様である、と誤伝されたことにもたいして不思議はない。

英国上下両院では、ただちに王家のスカンダルに対し、猛烈な論戦が開始された。いやしくも日没することのない大英帝国の皇太子として、あるまじき行為であると難詰した野党の一議員に対し、時の首相は、目下詳細取り調べ中であると苦しい答弁をくりかえした。

英国の全民衆は、ひそかなおそれをいだきながら、皇太子の帰国を待ちうけた。さいわいに矢の刺青は、事実

無根であることがわかった。

当時の英国の新聞の大見出しには、この民衆の安堵の気持を、

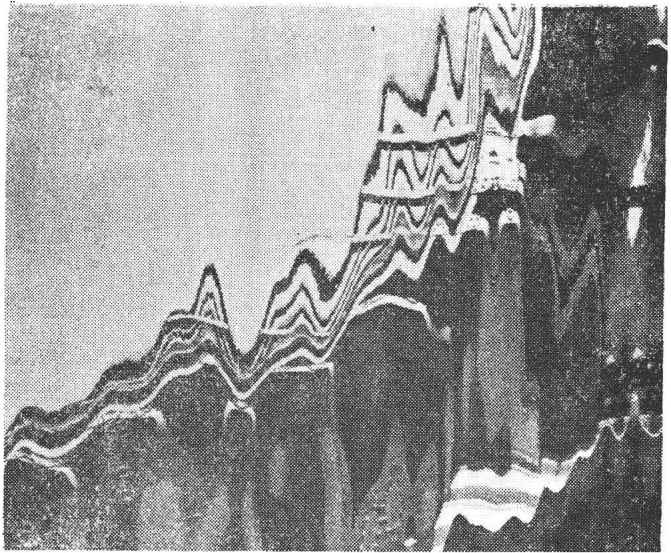
「皇太子の鼻は健在なり」

と微妙な一句で表現した。腕に彫られた美しい竜は、大英帝国王位継承の問題に、なんの影響も及ぼさなかったのである。

日本本国において、「文明人ニ対シテ恥ズカシキ行為」であるとして、法律で厳禁された刺青が、この皇太子を契機として広く欧米先進国の各王室に流行しはじめたことは、皮肉とも何ともいえないことである。日本刺青の芸術性を最初に理解したのは、浮世絵などと同じく、当の日本人ではなく、この国を訪れた外国人なのであった。

しかし、わが国においても、刺青の技術が、真に芸術といわれるまでに進化したのは、それほど古いことではない。今を去ること百数十年前、江戸天保年間が最初であった。

数寄を好み、伊達を競った、当時の江戸の男女の肌には、あるいは繊細、あるいは豪放、絢爛華麗な極彩色の錦絵が、色とりどりに咲き匂ったのは、日本風俗史の一



ページを飾る異色ある話題とされている。

だがそれも、今となつては、たんなる歴史的事実にすぎない。当時の名作傑作の数々は、あるいはむなしく泥土と化し、あるいは煙と消え去って、その片鱗すら、われわれの眼にふれることもないのである。

人の命は短く、芸術の命もまた短い。

知己を百年の後世に求めることは、刺青師というはかない宿命の芸術家には、しよせん望んでもかなわない夢なのだった。

もちろん、医学の進歩につれて、刺青の作品の面影を後世に伝えようとする不可能事も、現在ではある程度まで可能となった。一つは写真の撮影であり、一つは刺青の人皮を死体からはぎとり、特殊の加工をほどこして保存する方法である。

本郷の東大医学部標本室にも、百枚近くのそうした人皮が秘蔵されている。

・医学部本館、三階の半ばを占め、通称医学博物館といわれているこの標本室は、毎年五月祭の当日には、広く内外に公開される。もちろん、わが国最高の学の殿堂といわれるだけに、この標本室には、ほかにも無数の珍し

い標本がおさめられている。たとえば入口近くには、金色まばゆい極彩色の棺におさめられた古代エジプトのミイラがある。内村鑑三、夏目漱石、その他著名の人々の死後にとり出された脳髓がある。自分の死後も身をもつて、医学の進歩のために貢献したいと遺言を残して死んだある医学博士夫妻の完全な骸骨が、うつろな両眼で人を見つめて立っている。かつて一世をさわがせた玉の井お齒黒溝のバラバラ事件の死骸も、ガラス棚のどこかに発見されるのだ。しかし、そういう標本のどれにもまして、この一室を訪れて来る人々の注意を完全に奪ってしまうものは、壁を埋めてかかげられた刺青人皮のほかにはない。

それは奇妙なアラベスク、刺青師と、この芸術の愛好者との魂を、死後にとどめた曼陀羅図。

特殊な薬品でなめされ、ひろげて額におさめられたこれらの標本は、精妙な錦絵のようにも見える。豪華なゴブラン織の壁掛を偲ばせるような趣きもある。

牡丹、唐獅子、金太郎、般若、花和尚、九紋竜、図柄は多様多岐である。その一枚一枚の標本には、命を刻む苦痛の悶えと、一本の針に情熱を傾けつくした刺青師の

喘ぎとが、いまでも強く息吹きしている。

一つ一つをとりあげたら、それはたしかに芸術品ともいえるだろう。しかし幾十枚と集まると、それはただならぬ怪奇な雰囲気と、いうにいわれぬ異様な迫力とをもつて、人々の心に迫って来る。じつとこの標本を見つめる人は、たちまちこの現世を超越した妖奇な世界へ、ひきずりこまれて行くような思いをおさえることはできない。

ある時、私といふしよにこの部屋をおとずれた一人の新聞記者は、

「人は死して皮を残す——か」

と上ずった声でつぶやいた。感嘆と、恐怖と、興奮と、陶酔のいりまじった、複雑な表情を浮かべながら。

彼はその時つづけていった。

「刺青はたしかに芸術だよ。すくなくとも、ここにしまつてある標本に関するかぎり、僕は君の説を認めざるを得ないね。だが、自分の体に傷をつけ、痛い思いをして、体力を消耗させるということは愚かな話だ。常識のある人間のすることではないね」

愚かといえは愚かである。非常識といえはこれ以上の

非常識もない。だが一方では、刺青は阿片のような魅力を持つている。一度この魅力の虜となったが最後、もはや抵抗の余地はない。刺青に憑かれた人々にとつては、これにかわるべき世界はほかに存在しない。

たとえば、そのもつとも著しい例の一つは、やはりこの部屋に皮を残した前の彫勇会会長、村上八十吉である。

その刺青は、大きさにかけては、空前絶後といわれている。もと新富座で出方をしていた彼の刺青は、背中、腕、股はいうに及ばず、顔から頭、手足の指、耳の中にも隙にも、局部にさえも及んでいた。生まれながらの白い肌が残っていたのは、ただ掌の内側だけなのだった。

生前、彼の顔を遠くから眺めると、印度人か何かのように見えたという。近づいて、それが一面の刺青だと知った人は、思わず驚きの叫びをあげずにはおられなかったということである。

そこまで全身あますところなく、墨を入れずにはおさまらなかつた、彼の心境を考えると、私はいつも肌寒い感じがする。それはもう、執念という以外の何物とも思えない。

立場は少し異なるが、こうして百枚近くの刺青の標本がこの一室に収められたのも、やはり刺青の魔力に憑かれた人々の力によるものである。

これがその他の標本類、たとえば結核や癌などの病理標本なら、それを集めるにしたところで、それほどたいした困難はない。大学の付属病院などには、そういう患者は無数に入院している。その中から、施療患者か何かで適当な人間を物色すれば、事は簡単にすむのである。

しかし、刺青の標本となると、話は少しかわつてくる。第一に、芸術的な作品を捜し出すという困難が横たわっている。

これが、ただ体に墨を入れているだけではないという程度のものであれば、捜し出すのも、それほど困難なことではない。少し銭湯を歩き回れば、二の腕に小さく女の名前が彫つてあったり、背中に未完成の岩見重太郎が一人で力みかえっていたりするものは、よく見かけられる。しかし、完成した芸術的な作品となると、問題は全然別になつて来る。

名人といわれるほどの刺青師の数は、いかなる時代にも、わずか十指を屈するにも足りない。

明治以後、きびしい取締りの眼をのがれ、陋巷に食うや食わずの生活を送りながら、門外不出の技術を守りつづけた刺青師といえ、初代、二代目の彫宇之をはじめ、彫兼、彫金、彫五郎、彫安などがあげられるだけ。そのほかは、墨以外には朱を刺す技術も知らないような、素人めいた存在にすぎなかった。

そのような名人といわれるほどの刺青師でも、絵絹にむかつて、感興のおもむくままに筆を走らせるのとはちがって、会心の作が成るか成らぬかは、相手あつてのことなのである。色の白い、きずのない、肌目のこまかいねつとりと脂ののつた、なめらかな肌——たとえちよつとの痣があつても、傷があつても、刺青師の感興はそがれてしまう。

彼らの理想は異常に高い。容易には求めることもむずかしい。

そしてまた、そのような肌の持主があつたとしたところで、その人間が、刺青をしようという気になるだろうか。上流社会の人々なら夢にも思つてみないだろう。そこには強固な社会的偏見がある。苦痛に対する恐怖がある。一度ふみ越えてしまつたら、二度と後へは引返せ

ない一線をのり越えて、たとえ美しくはあつても、一生消えない烙印を、その肌にとどめようとするのは、容易なことではできないのだ。

たとえば、その気があつたにせよ、全身に及ぶりつばな刺青は、なみ大抵の努力ででき上がるものではない。何カ月のあいだ、毎日のべ何千本、何万本という針を肌身に刺しこんで、墨や絵具を注ぎこむ激痛、それに伴う発熱や、白血球の減少によつて生ずる体力の消耗、けつして少ないとはいえない経済的負担、そういうことをあれやこれやと考えあわせると、未完成のままで終わる刺青が多いのも、ごく当然のことなのである。

だから、完成した芸術的刺青は、何万人に一人という割合で存在するだけである。それを捜し出すことも、並大抵の努力ではできないことなのだ。

もつぱら、この標本収集の任にあたつたF博士は、十数年というあいだ、一日もかかさず何軒かの銭湯を巡歴した。やくざ、香具師、鳶職、その他刺青のありそうな稼業の人々の間を、それからそれへと、伝手を求めて歴訪した。その中に費用が続かなくなつて未完成のままで終わっている刺青があると、自費を投じてやつてまで、

その完成に協力した。

F博士もまた、刺青の持つ怪奇な魅力、阿片のようなその魔力に、憑かれた人々の一人だったのだらう。

さて、そのような努力の末に、ある傑作を探りあてたとしても、それだけで問題は解決しない。第二に横たわる難関は、刺青譲渡の契約である。これが難題であることは、あえて強調するにも及ぶまい。どんなに生活が困っていても、まさか背中に彫った刺青の皮を剥いで、衣食の資にあてようという酔狂の人間がいるはずはない。結局、その家にお百度をふんで、元米迷信深いこの連中に、とくと理屈をかみわけてきかせ、やつのことで、死後解剖と刺青譲渡の契約を結んで前金をわたす——これもまた、絶大な根気と、外交的手腕を要する仕事である。

そして最後に、相手の死ぬのを待たねばならぬ。十年先か、二十年先か、三十年先か、全然見当もつかない先の話である。といって、待ちくたびれたからとしびれをきらし、一服盛るような非常手段もとれないし、その長年月のあいだに、相手の刺青が無事に残っているかどうか、人知の予測し得る範囲ではない。天災、戦災、失

踪など、事故は無数に考えられるのだから。

この数十枚の標本には、一枚一枚に、そんな苦心がこもっている。後に刺青博士と呼ばれ、関八州の親分連から、感謝のしるしに石灯籠を贈られたほどのF博士の情熱がなかったとしたら、たとえ東大医学部の権威をもつてしたところで、世界に誇るこの収集に成功することは難中の難事であろう。

だが、このような苦心と努力を払って、収集された標本も、刺青の持つ特異な美を完全に再現しているとはいえないのだ。

生きた肌では濃藍色に見える墨も黒ずみ、冴えた朱の色もやけたように妙に赤茶けて見える。そのような色素の変色褪色は、しばらく問題外にしても、その凶柄には、どこか不自然な誇張がある。これはもちろん、微妙な屈曲と凹凸を持った人間の皮膚を、平面にひき伸ばしたことに伴う欠陥だった。

刺青師のところを訪ねて、下絵を見せてもらうと、よくわかることだが、その帳面に描かれた、人物の各部分は、どれも風絵のように均衡を逸している。顔は大きく手足は小さく、不釣合な一見稚拙と見えるその姿態が、

紙から離れて人間の肌に移されたとき、どんなに生彩を放ってくるのか——そのような例に、私は何度となく驚かされた。実に、ある刺青師がいみじくも言っているように、刺青は平面的な絵画として見るべきものではなく、立体的な彫刻として眺むべきものだろう。

F博士ほどの権威が、この点に気づかないわけはなかった。この標本室の中央の机の上にのっているいくつかのトルソが、その最後の解答なのだった。

刺青の人皮をもとの人体の形に形成し直して、立体感を与えたこの種の標本には、なるほど、壁の額に収められている人皮のような不自然な感じは跡を絶っている。しかしそこには、それとまったく異なった、別の恐ろしさがまつわりついているのだった。

首もなく、手足もなく、ただ刺青をした胴体だけが、ぶきみな形で、空間にあざやかな色彩を浮かべているということとは、その上に描かれた図柄が真に迫るだけ、いうにいわれぬ恐ろしさを人々に感じさせるのだ。

この部屋に皮を残して、この世を去った人々は、男か女か、それさえ一目ではわからない。しかし、その一生は常人の思いも及ばぬ変化と波乱に満ちていたろうとい

うことは、だれにでも容易に想像できるのだ。だが、これらの人々が、どんな人物だったのか、どういう動機でこんな刺青を彫るようになったのか、その刺青が彼らの後半生に、どんな影響を与えたのか、その人生は時のかなたに忘れ去られ、ただわれわれの想像を、いたずらに刺激するばかりである。

たとえば、この中の一枚は、有名な毒婦、高橋お伝の皮だという。しかし、F博士の権威をもってしても、これは証明できなかった。大阪医大に残されている女賊、オシロ雷おしんの物といわれる皮も、その誤聞であることが証明されている。

そのように、権威ある筋から何度否定されても、なかなかそういう噂が消えないのは、やはり人々の心の奥底にひそんでいるおさえきれない好奇心が、執拗に無意識の中にでも、こういう標本を残して去った人々の姿を追求するためののだろうか。

そのような伝説は、しばらく忘れ去るとして、この標本の中の一人の人物、この中の一つのトルソの主については、私はその刺青にかくされた恐ろしい事件を詳細に物語ることができる。

中央の机の上の、精妙をきわめた大蛇丸の刺青——

戸隠山の奥深く、自雷也、綱手姫と名のる二人の怪人と妖術の妙を競ったといわれるこの妖術師は、今も鎖かたびら、百日かずらのいでたちで、人を嘲けるような冷笑を浮かべながら、トルソの背中に妖術の印を結んで立っている。そのまわりには、腋の下、横腹のあたりまで一面の青黒いぼかしの中に、おどろおどろと朱色の妖火が燃えあがり、苔の生えたように青黒い背の鱗と朱色の蛇腹をねじらせて、一匹の大蛇が左肩のあたりへじっと鎌首をもたげている。肘のあたりから断ち切られた腕には桜と紅葉が散り、膝の上しか残っていない太股には、大輪の濃艶な緋牡丹が、いくつか鮮やかに咲き匂っている。

その繊細な針のあと、いうにいわれぬ色調は、数多くの標本の中でもとびぬけて他を圧していた。

「彫安作、昭和十六年二月」

と、右の腰に、作者の銘が刻まれている。

彫安といえ、その道の通人たちの間でも名人の名をうたわれた刺青師であり、しかもこの作、大蛇丸はその一代の傑作だった。

かつて、この刺青はこの世のものとも思われない妖艶な美女の蠟肌ろうきに躍動していた。

その名を野村網枝という、彫安自身の娘であった。

網枝と、その双生児の妹、珠枝とが、この世に生をうけたとき、彫安が胸にいだいた感情は、およそ察するにたたくはない。

願わくは、この娘らの肌、絹のごとく美しかれ、珠のごとく麗しくあれと、彼はひそかに念じたのだろう。そして二人の娘が成長したときには、その美しい肌に、自分の精魂を刻みこもうと、ひそかな願いを二人の名前に託したのだろう。

その悲願も、ついにかなえられる時が来た。長じてからも、網枝の肌は、文字どおり絵絹のように美しかった。

何十人という女の肌に針をおろした彫安でさえ、われを忘れたほどの肌目の細かさだった。

それに加えて遺伝と環境、この二つが網枝の体内に、肌を飾らずにはおられないというつきつめた気持をかりたてた。

安定した、堅気の商売を投げすてて、やむにやまれぬ気持から、その一生を刺青という恵まれぬ仕事に託した

父親と、自分からその刺青に惚れこんで、彫安といっしょになった母親と、二人の血が、絹枝の体内にたぎっていた。また、不具者ばかりの世界では、五体のそろった健全な者が、かえって不具者あつかいをされるといわれるように、その家を訪ねて来る者が、男も女も一人として、生まれながらの白い肌を持っていないような環境では、絹枝が自分に、刺青のないのを恥じる気持になるのも、これは当然なことだった。そして最後に、女の一生を決する恋——その初恋の相手というのも、写真屋くずれのやくざだった。自分でも彫安の手にかかり、肌の白い女など女房にできるものかと、はつきり公言していたのだ。

絹枝たちの兄、常太郎は子供のころから、彫安にみっちり刺青の技術をたたきこまれていた。自分の技術、門外不出のこの秘伝をつがせるのは、この子のほかにはないという一刻な思いこみ方だった。

常太郎が徴兵検査をうける直前、彫安は息子の背中に針をおろしはじめた。元服の式のかわりに、息子の肌を錦で飾ってやろうという厳肅な親心のあらわれだった。

それを見て、今までこらえにこらえていた絹枝の感情

も爆発した。

「わたしにも刺青を彫ってちょうだい。兄さんにも負けない、きれいな、大きいのを彫って」

と、絹枝は父の前に手をつけて哀願した。

彫安は首を縦にはふらなかった。嫁入り前の娘がなんということだ。親の身として、わが娘の体に傷がつけられるかと、口をすっぱくして叱った。

絹枝はだまってその場を去り、それから二日は何事もなく過ぎた。

彫安は、なんとなく物足りない思いがした。女や、身分のある人間には、たとえ彫ってくれとたのまれても、かならず一度はとめるのだが、それは自分の責任をのがれるというよりも、かえって相手のつきつめた気持をそのかし、火に油をそそぐ結果となるのは、長年の経験から、よく知っているつもりだったが……

あの時なぜ、娘の言葉どおりに、一寸でも五分でも、墨を入れてしまわなかったかと、彫安は胸をかきむしられるような思いだった。ちよつとでも、傷をつけてしまったら、おさえつけても後は彫れる。だが親として、今さらそれも言い出しかねた。

その日の夕方、出仕事から帰って来た彫安を、絹枝は何か曰くありげな微笑を浮かべながら迎えた。

「お父さん、これでもまだ、わたしには刺青をしてくれないの」

絹枝は着物の右袖を、じつと肩先までまくり上げた。

白い二の腕の一部分が、桜色に充血し、腫れたように盛り上がっていた。小さな桜の花が三つ、細い青い筋彫のまま、その上に散っていた。

常太郎の仕事だということは、すぐ、彫安にのみこめた。いうにいわれぬ無量の感慨を両眼にこめて、彼は娘の顔を見つめた。

「どう、これでもお父さんが彫ってくれないなら、全身兄さんにやってもらうわ」

負けた——と彫安は思った。だが、彼にとって、これほど嬉しい敗北もなかった。

「二階へ上がって、裸になんやよ」

彼は眼を輝かせてつぶやいた。

このようにして、数カ月の後、新しい一人の女、大蛇丸の絹枝が誕生した。

全身に、極彩色の刺青が完成した夜、絹枝はその恋人

のたくましく彩られた腕に抱かれて泣いた。

「二人でこうして抱きあっていると、白いところなんか見えないのね……これでいいのよ。いいんだわ。わたしの肌のこの絵が消えてしまわないかぎり、わたしの気持ちもかわりゃしないわ」

刺青の絵は消えなかった。しかし、二人の愛情は、跡形もなく消えてしまった。まもなく、彩られた女、絹枝は男から男へと、はてしない彷徨の旅路をたどりはじめた。

そしてまもなく、すべての日本人の生活を空白にした大戦が、始まり、続き、そして終わった。

五年の後、絹枝が成熟しきった濃艶な一人の女性として、混乱をきわめた戦後の東京にあらわれたとき、その前に待っていたものは、鋭敏なジャーナリストたちが、口をそろえて「刺青殺人事件」とよんだ、凄惨な連続殺人事件であった。絹枝自身も、その恐るべき殺人鬼の手にかかって、命を絶たれた一人だったのである。

この一連の殺人事件は、すべてこの大蛇丸の刺青をめぐるくりひろげられたものだった。しかも事件の全体には、妖術の世界の出来事を思わせる、あやしい狂わし